

# 生成 AI のもたらす恩恵と課題

## ―法整備と意識の統一―

齋藤 叶一郎

AI は急速に発展しており、その影響は我々の日常生活に大きな影響を与えている。AI の能力はすでに人間を超えているものもあり、このまま進化し続ければ、人間の文化水準を上げることができるかもしれない。一方で進化し続ける AI には人間社会に負の影響を与えてしまうリスクも内包している。本稿では、昨今著しく進化を遂げている生成 AI について述べ、生成 AI が社会にどのような影響を与えているか、また急速に発展していく AI に対して我々はどのような対応をしていかないかについて検討した。

既存のデータを学習し最適解を生み出す従来の AI と違い、生成 AI はディープラーニングシステムの発展による学習機能の進化と、大規模言語システムとの組み合わせにより、全く新しいアイデアを生み出すことができる。生成 AI はその創造性、汎用性の高さから世界中で高い使用率を誇っており、日本の企業でも実際に導入される事例も増えてきている。

生成 AI は我々の生活を支えてくれている一方で、実在する人物の写真などを加工し偽の情報を作成するディープフェイク問題や音声学習などによる権利問題など多くの社会的リスクを内包している。そこで本稿では日本と EU の AI の法律を比較した。AI 産業に乗り遅れていた日本は 2025 年 9 月、AI イノベーションや研究を促進していく AI 推進法が施行された。これは国内初の AI に関する法律である。一方 AI 産業が進んでいた EU では 2024 年 8 月に、生成 AI を含めた AI の規制事項を定めた AI 規制法が施行されている。その中で AI の使用に関してリスクベースアプローチによる段階的な規制が設けられており、破れば罰金が課されるものであり、AI のリスクにより対応した法律があることが分かった。

日本が AI を促進する法律を作成したことは大きな一歩であるが、AI の内包するリスクを無視することはできず、日本も EU のように段階的な規制を設けるべきだと筆者は考える。そのように徐々に日本の AI に対する意識を高めて行き、最終的には EU やその他世界との AI の認識を統一していくべきであると結論付けた。